

全国 YMCA ユースチャレンジ 2021 山梨 YMCA 「ベジフルズ（一から始める食育・農業活動）」 活動報告書

プロジェクト概要と実施内容

子ども達は、スーパーに並んでいる野菜を見る機会が多いが、実際に畑などになっている姿を見る機会はそう多くない。自然豊かな山梨県でさえも子ども達が第一次産業に触れる機会というものはないのである。そこで山梨 YMCA では、土を耕し、苗を植え、収穫まで皆で愛情込めて作物を育てていくプログラム「ファーマー」、フルーツ王国山梨の果物の魅力を勉強し収穫する「ピッカー」。ベジタブル（野菜）とフルーツ（果物）を学んでいくキッズ（子ども達）、「ベジフルズ」を行っていきたいと考えた。特に今回のユースチャレンジでは「ファーマー」に力を入れていきたいと考えた。



肥料を蒔いて耕地する様子



トマト苗に支柱をさす

このプログラムを行っていくことにより、野菜や果物の本当の旬について知ることができ、私たちが食べている野菜や果物がどのようにできているのか考えられる機会づくりになると考える。

他の野外活動とは趣が多少異なり、プログラム進行も当日の様子となる。ファーマーでは現地に行ってからその時できることを探して活動を行っていくことが基本となる。天候により野菜や果物の生育状態が変わり、当日の農作業もどこまでできるか、考えなければならないからである。最初の1年は主に講師が農作業について伝えていくが、年を重ねるごとにリピーターが自ら行えるような指導をしていきたい。また、畑のそばには水路や草むらがあるため、花を摘んでみたり昆虫を採集してみたり、水路の水で涼をとったりするなどして、山梨県の自然とも触れ合う機会を設けることもできる。



水路からかえるがたくさん！



蒔く種を考える

基本は夏野菜の収穫がメインとなるが、このファーマーは1年間、春夏秋冬を通して活動を行っていることを前提としているため、冬野菜にもチャレンジをしていく。また、畑を耕し作物を育てるところにとどまらず、「食育」の要素を深めていく。実際に自分たちで作物を育てることにより、その大変さ、難しさを感じることを通して、農家の方へ感謝



晴れでも雨でも収穫収穫♪

の気持ちを抱き、野菜が苦手であっても、自分たちが一生懸命愛情を込めて作ったことにより、少しでもいいから苦手な野菜にチャレンジしてみようと思ってもらえるような取り組みにしていきたい。

プログラムは5月からスタートした。夏野菜の苗を植えるところから始まる。初めは耕運機もなかったため、講師、リーダー、メンバー全員で立ち鉋（かんな）や鍬（くわ）を使って耕した。ガイドを設置し鍬で地面を掘り起こし、牛糞等の肥料を蒔いて土をかぶせる。それから苗を植えてマルチ（土を覆うカバー）をかぶせるというプランターではできない体験を行った。畑は日照時間日本一を誇る北杜市の高原にあるため、比較的寒いが太陽光がよく降り注ぐため、成長が早く、かつ長く収穫を楽しむことができる。6月にはズッキーニ等の苗を植え、ピーマンやナス以外の夏野菜にも注目した。野菜によっては子ども達も「その野菜何？」というものがあつたよう。野菜の花等も観察することができた。7月に入ると徐々に収穫ができるようになり、その場で洗って丸かじりすることもできた。8月は夏野菜の収穫が本格化し、実際に収穫したての野菜を使って料理に挑戦。その料理も実際に何がどれだけとれるかわからないので、その場で野菜を確認しながら決めることとなった。かぼちゃがこの時期に収穫できることを知らなかった子が多かった様子であった。9月には夏野菜がまだ収穫できており、加えてほうれん草を収穫。茎部分が多いほうれん草で、店頭には並んでいるほうれん草とはまた違う種類に本当に食べられるのか不安に思う子どもも見受けられた。10月にはさつまいも100株



採れたてピーマンを切る。

の芋掘り大会を実施。1日で終わらず2日間に分けて収穫する大豊作となった。芋掘りをしたことのある子どもは数人見られたが、それだけたくさんの収穫は初めての経験だそう。本来予定していた焼き芋は各ご家庭でのお楽しみとなった。11月には小麦の種を蒔き、ニンジンも収穫。また、今までたくさん収穫させてくれた夏野菜や引き抜いたさつまいものつるを刈った枯草とともにまと



さつまいもは大きいもので70cm近く



大きい三つ又を上手に使いこなす子ども達

める作業も行い、ただ収穫するだけでなく最後の片付けまで感謝の気持ちを持って臨むことができた。終わってからは収穫したニンジンも丸かじりしたり、キャロットケーキを作ってみたり。ニンジンのケーキは甘さ控えめで、ニンジン嫌いな子どももいたが、おいしそうに食べていた。12月、1月は麦踏み体験。によきと生えている緑の若芽に感動しつつ、頑張る生えてきた小麦

の赤ちゃんを踏むことへの罪悪感を交えながら体験開始。麦が育ち実として収穫し、粉碎して粉になり、みんなの前に届く。そしてそれがパンやうどんになる。その過程を市販の小麦粉を用いて説明しながら、山梨の郷土料理ほうとうを作り、舌鼓を打った。

現在2021年5月から2022年1月までのベジフルズ・ファーマーを行ってきて、参加人数は少ないながらリピーターも増えてきた。収穫の無い1月は参加者がいないのではないかと危惧したが、リピーター全員参加の中、にぎやかに終わることができた。2月、3月はできることがないため、お休みとする。

全工程を通じて土や葉を触らないと先に勧めないので、子ども達に自発的に動くように勧めるが決して無理はさせず、だんだんと慣れていくように促した。結果、一回目まったく触れない子もいたが、回数を重ねるごとに自然との距離が近くなっていた。耕地、追肥、苗植え、種まき、剪定、収穫、収穫した野菜の洗浄等、一連の流れを年間で体験することができた。



自然豊かな畑周辺の環境が子どもをリラックスさせる

このプロジェクトを通じて考えたこと

自ら地を耕すという行為が、学校で野菜や花をプランターで育てるという体験のみでは経験することが難しい。林間学校等もあるが、年間を通してそのような活動を行うことはあまりないように思う。その大変さをみな痛感していた。同時にきれいに耕地する方法や牛糞を蒔く工程等、普段経験することのない体験に子ども達は興味津々に取り組んでいた。毎月来る度に成長する野菜、変わる作業に嫌気をさすこともなく、数カ月経ったころには自ら動き、刈った草の撤去等を行っていた。収穫が一番楽しいのはもちろんだが、次はどうなるのか、次には収穫できるといいな、といった声が聞こえた。2回以上参加してくれたメンバーに関しては、1回目と2回目、3回目...の作物の様子を比較することにより、食べ物（野菜）ができていく過程について知る機会となったと思う。1回のみ参加してくれたメンバーに関しても、生育途中の野菜（緑色をしたトマトやナスやピーマンの花）を見ることにより、野菜ができる過程について知ることができたと思う。

実際に自分たちが育てて収穫した野菜を、自分たちで調理し食べたことにより、食の大切さを感じてもらうことができたと思う。それと同時に、全てが収穫できるわけではない（生育不良や虫害により）ことを経験することにより、野菜を育てることの難しさや農家の大変さについても感じるることができたと思う。

山梨YMCAの畑は、自然豊かな畑地に位置しているため、近くには小川が流れ、虫や花も生育している。そのため、活動中に水で遊んだり昆虫と触れ合ったり花を摘んだりすることができるため、自ら自然に近づいていく機会を設けることができたと思う。初回に来たメンバーの中には虫を触ることができない、手に土がついたらまた汚れるのにすぐに洗う、等怖がったり汚く感じたりする子もいた。しかし、回数を重ねていくと、こんな虫がいたと捕まえて見せに来たり、軍手もせずに泥に手を突っ込んだりして、積極的に農業に携わり、自然を感じていく姿勢が伺えた。子ども達が自ら「次は〇〇を作りたい！」と興味を示してくれたことがとてもうれしかった。そこから「その野菜の収穫時期はいつか、どのように育つか」と話を広げることができた。

普段行われている定例活動に比べてこのベジフルズは、全体的にゆったりと時間が流れるため、参加者と普段よりコミュニケーションを取れたことに加え、リーダー同士でも普段よりコミュニケーションを取ることができ、リーダーの交流の場としての機能も果たした。メンバー、リーダー皆一体感のあるプログラムになったと思う。

今後、ユースチャレンジを希望する人へのアドバイス

ユースは歳を重ねて熟練されたスキルではなく、今の子どもに近い視点を併せ持つてその若い視点から新しい取り組みを考えることができる。いろいろな挑戦をすることができるパワーを持っていると思う。今回山梨 YMCA から新しい野外活動を発信したいと考え、ディレクターやリーダー、関係講師とアイデアを出し合った。しかし考えはあっても、スタートする第一歩にはどうしても収支という現実的な部分がのしかかることを実感した。しかし、未来への投資として若い間に行えることはどんどんチャレンジしていったほうが良い。年齢を重ねてできることも変わり、視野も広がりいろいろな可能性も出てくるが、若いバイタリティ溢れる年齢でしかできないことも多々あるように思う。その歳その時その場所で。ユースチャレンジはその挑戦を後押ししてくれた。何かをやってみたいという気持ちが起きた時、YMCA に一声かけると何かきっかけがつかめるかもしれない。